

平成 27 年度第 2 回 小笠原諸島世界自然遺産 地域連絡会議
議事要旨

■日時 平成 27 年 12 月 15 日（火）16：00～18：20

■場所 小笠原村地域福祉センター／村役場母島支所／環境省関東地方環境事務所

■議事次第

- (1) 遺産地域の管理における地域連絡会議の役割について
- (2) 世界自然遺産の管理に係る地域課題の検討状況について
- (3) 科学委員会からの助言
- (4) 遺産管理の現状と今後の予定
- (5) その他

■資料

- | | |
|--------|-------------------------------------|
| 資料 1 | 小笠原諸島世界自然遺産地域連絡会議設置要綱改正案 |
| 資料 2-1 | オガサワラオオコウモリの共生に係る地域課題 WG 報告 |
| 資料 2-2 | 愛玩動物による新たな外来種の侵入・拡散防止に関する地域課題 WG 報告 |
| 資料 2-3 | 新たな外来種の侵入・拡散防止に関する WG 報告 |
| 資料 2-4 | 村民参加促進の取組について |
| 資料 3 | 科学委員会に助言を求めた事項 |
| 資料 4 | 遺産管理の現状と関係機関の今後の事業予定 |
| 資料 5 | 世界遺産登録 5 周年記念行事について |

- 参考資料 1 小笠原諸島世界自然遺産地域科学委員会設置要綱
 参考資料 2 平成 27 年度第 1 回小笠原諸島世界自然遺産地域連絡会議議事要旨
 参考資料 3 平成 27 年度第 1 回オガサワラオオコウモリの共生に係る地域課題 WG 議事要旨
 参考資料 4 平成 27 年度愛玩動物による新たな外来種の侵入・拡散防止に関する地域課題 WG 議事要旨（第 1 回・第 2 回）
 参考資料 5 平成 27 年度第 1 回新たな外来種の侵入・拡散防止に関する地域課題 WG 議事要旨
 参考資料 6 世界自然遺産に関する村民意向調査結果速報
 参考資料 7 平成 27 年度の世界遺産管理にかかる主な会議・説明会等

■協議結果概要

○会議は公開で行われた。

○主な協議内容は以下のとおりであった。

（1）遺産地域の管理における地域連絡会議の役割について

- ・地域連絡会議設置要綱の改定案が承認され、小笠原環境計画研究所が新たに構成団体に加わった。

（2）世界自然遺産の管理に係る地域課題の検討状況について

<オガサワラオオコウモリの共生に係る地域課題 WG 報告>

【意見】

- ・コウモリの適正個体数等の科学的知見について、専門家からご意見をいただける場を早急に設けてほしい。

<新たな外来種の侵入・拡散防止に関する WG 報告>

【共有事項】

- ・次年度の科学委員会下部 WG の休止について、対策を進める上で随時専門家の意見を伺えるようなチャンネルは確保するという条件のもと、合意を得た。
- ・管理計画の改定は、科学委員会下部の WG と地域連絡会議下部の WG との合同で検討していくことについて合意を得た。
- ・新たな外来種の侵入の未然防止のための話と、既に侵入したものへの対策の話は分けた上で、関係機関・団体の参画について調整を図りながら引き続き地域課題 WG で議論する。

【意見】

- ・新たな外来種の水際対策を議論する場が必要である。
- ・地域課題 WG では議論に必要なステークホルダーが揃うよう、会議の位置づけや構成メンバーは入念に調整を図ってほしい。
- ・既にツヤオオズアリが侵入している地域における対策が早急に実施されるよう、予算と体制を明確にしてほしい。
- 来春までに動けるよう体制を整えるよう、事務局間で検討する。
- ・侵入の未然防止を最優先して検討をお願いしたい。
- ・ツヤオオズアリのように行政的な受け皿が明確でないものへの対策をその都度地域の行政機関と団体だけで考えていくのは困難であるため、科学委員会下部の新たな外来種の WG は休止すべきではなく、むしろ強化すべきタイミングである。早期にリニューアルした体制を検討いただきたい。
- ・新たな課題を前に、より広い関係部署が参画して議論する場を設定すべきタイミングだと思ふ。
- ・課題ごとに検討の枠組みを整理した上で、次回以降のワーキンググループの体制を検討する必要がある。従来の地域連絡会議の枠組みは広げるが、課題自体は絞りこむのがよいと思う。
- ・ガジュマルは侵略性の高い植物であるので、農協で農業者に対して注意喚起する等の措置をとっていただきたい。
- ・島内で販売されている内地からの花木について、防疫機関がチェックしているか確認してほしい。
- ・小笠原の固有種と同属の種が侵入し、交雑するリスクを懸念している。関係行政機関でご一考いただきたい。

<村民参加促進の取組について>

- ・特にご意見はなし。

(3) 科学委員会からの助言

<外国船の入港について>

【意見】

- ・外国からの船の入港に伴い、様々な外来種の侵入リスクが高まる。産業動物への影響と自然環境への影響リスクは評価されておらず、受け皿や議論の枠組みもないので不安である。
- ・ヨットや、急患で寄港する外国船による外来種侵入リスクも高いように思う。
- ・ブラナリア、ミカンコミバエ、ヤンバルトサカヤスデ等を媒介する土が重要なファクターだと感じる。
- ・3月に入港予定の客船について、船内の客に対し観光協会から周知することは可能なので、控えてほしい行動等の注意事項について行政で整理してほしい。

<遺産管理の現状と関係機関の今後の事業予定>

【意見】

- ・有人島でのネズミの生息状況や被害の実態を調査した上で、今後有人島におけるネズミ対策も検討してほしい。

<世界遺産登録5周年記念行事について>

【共有事項】

- ・今後自然遺産地域4地域の市町村が様々な連携を図るべく、議論を開始している。

<遺産管理計画・アクションプラン改定WGについて>

【共有事項】

- ・地域連絡会議下部の部会の一つとして、来年度、遺産管理計画・アクションプラン改定WGを設置予定。参加メンバーや科学委員会下部WGとの連携方法は今後調整する。

【意見・要望】

- ・次期管理計画の策定にあたっては、科学的知見のある人、現場の知識がある人、組織論として何ができるかを考える人、影響を受ける島民の4者が話し合う必要がある。
- ・管理計画は概念論に終止せず、今後5年間で実施することを具体的に反映してほしい
- ・管理計画・アクションプラン改定WGは国立公園の管理計画との整合も図っていただきたい。

(4) その他

- ・母島ではウミガメがネズミによる被害を受けている。一層のご支援をお願いしたい。

■議事録

○上杉事務局長より挨拶

- ・今回、現地で参加することができ嬉しく思っている。小笠原が世界遺産に登録されて4年半の間には、兄島へのアノール侵入やネズミの際侵入が認められたり、ツヤオオズアリの分布が拡大する等、登録時よりも条件が悪い方向に変化している部分も生じている。こうした様々な課題に対処するため、管理機関を中心に関係団体、地域の方々と議論を行ってきている段階である。今後とも、世界遺産の価値の保全管理・適切な活用をしていく観点から、この地域連絡会議の役割は大きいものと認識している。来年6月には遺産登録5周年を迎えるが、状況の変化があるので、管理計画・アクションプランについても見直す必要があると考えている。その検討にあたっては、地域連絡会議へ参加いただいている皆様の力添えが必要なので、ご協力をお願いしたい。環境省で整備を予定している世界遺産センターは、先日落札され、平成29年4月のオープンを目指し整備を進めていく。工事にあたっては地域の皆様にご迷惑をおかけする部分もあるかと思うが、誠実に対応していきたい。運営管理にあたっては、地域の関係皆様のご協力をいただきながら進めていきたいと思う。本日の科学委員会からの助言、地域課題ワーキンググループからの報告を受け、地域としてどのように取り組んでいくのかという観点から議論したいので、皆様の活発なご意見をいただければと思う。

○森下村長より挨拶

- ・本日列席賜っている科学委員会の委員の皆様には、科学委員会や今年度の様々な会議でのご助言をいただいたことに感謝したい。また保全事業の現場では熱意をもった取り組みが進められている。グリーンアノールやネズミの問題は、課題はあるものの、少しずつ前進している状況には村としても希望を持って関わらせていただいている。一方で母島のツヤオオズアリの対応等、新しい課題もあり、村民から不安の声も上がっている状況である。来年度世界遺産登録5周年を迎えるが、改めて将来ビジョンを描き、村民と共に遺産価値の保全に取り組んでいただければと思う。

(1) 遺産地域の管理における地域連絡会議の役割について

- ・環境省・尼子より資料1に基づき説明を行った。
- ・地域連絡会議設置要綱の改定案が承認され、新たに構成団体に加わった小笠原環境計画研究所より以下のとおり挨拶があった。

- 坂入（小笠原環境計画研究所）：参加させていただきありがとうございます。母島をはじめ、小笠原全体の自然環境について学んでいければと思う。世界遺産の保全のために尽力していく所存です。

(2) 世界自然遺産の管理に係る地域課題の検討状況について

<オガサワラオオコウモリの共生に係る地域課題WG報告>

- ・環境省・山下より資料2-1に基づき説明を行った。加えて、科学委員会において、①希少種であり、かつ重要な生態系機能も有しているオオコウモリの科学的な議論を開始すべき、②科学委員会は、個別希少種を扱う場ではないので、別途専門家会合を設けるべき、③社会的な許容量の議論をするために地域の関係者も議論に加えるべき、との提言がなされたことを報告した。
- ・説明を受け、以下のような意見及び質疑応答があった。
- 金子（観光協会）：科学委員会での議論の中で、コウモリの適正個体数に関する科学的見地はいつ頃どのような形で示されることになったのか。
- 山下：科学委員会では、科学的助言を行う場を設計することが決定すべきことが提言されたままで、具体的なスケジュールまでは議論されていない。
- 金子：できるだけ早くお示しいただきたい。公共用地の活用や樹木伐採時の配慮方針についての情報整理も今後議論されるということだろうか。例えば扇浦の浄水場跡地の活用方法の検討の際にコウモリに配慮した植栽を行うか等も、今後情報を集めて検討いただきたい。
- 大河内科学委員長：科学委員会としては、コウモリの住める環境の検討は行うが、オオコウモリの専門家がいないため、コウモリ自体の適正個体数等に関する科学的助言はできない。それはオオコウモリの保護増殖計画の事業で検討されるべきことである。吉田委員からは、IUCNのレッドリストでCRに分類される場合、哺乳類では500頭以上いなければならないという指摘があった。
- 堀越(iBo)：地域で議論する際、生物学的な情報が一つの基礎情報となる。管理計画にも関わる話なので、専門家の意見を聞く場を早急に設けていただきたい。
- 藤井（母島観光協会）：母島ではコウモリによる農業被害等はあまりないので、特に意見はない。

<愛玩動物による新たな外来種の侵入・拡散防止に関する地域課題WG報告>

- ・小笠原村・深谷より資料2-2に基づき説明を行った。

<新たな外来種の侵入・拡散防止に関するWG報告>

- ・環境省・尼子より資料2-3について説明を行った。
- ・説明を受け、以下のような意見及び質疑応答があった。
- 堀越：10月の地域課題WGの時点では、科学委員会下部のワーキングが休止されることは全く説明がなかった。アリとプラナリアに関してはマニュアルの地域での運用体制を地域課題WGで検討するとのことだが、新たな外来種の水際対策はどこで話し合うのか。管理計画の策定に地域連絡会議も深く関わるとのことだが、管理計画策定のデッドラインはいつか。
- 尼子：管理計画は来年度中に改定予定である。科学委員会下部の新たな外来種の侵入・

- 拡散防止に関するワーキンググループは来年度は休止し、マニュアルの運用体制をはじめとした地域で行う対策の実行体制を整えたい。水際対策についても関係行政機関が中心になり検討していくことになる。科学委員会下部のワーキンググループの委員にも随時意見照会をする等、チャンネルは確保していく。物流制限等を行うとなると、産業や村民の暮らしに直結する大きな話であり、遺産管理そのもの話だと思うので、管理計画の検討の中でも地域の皆様に議論いただきたいと考えている。
- 堀越：今年度中に科学委員会下部WGで作るのはアリとプラナリアのマニュアルということだった。
- 大河内：成果物としては、それとブラックリストである。当該ワーキンググループは、本来侵入の未然防止の目的があったが、それが何年もかけて議論してもできなかった理由・課題をまとめていただくよう要望した。
- 堀越：その課題の整理を受けて、現場を知る地域の行政と地域関係団体が、地域連絡会議下部WGで管理計画策定に向け検討を行っていくということか。
- 尼子：管理計画の改定は、科学委員会下部のWGと地域連絡会議下部のWGとの合同で検討していきたいので、引き続きご協力を賜りたい。
- 金子：新たな外来種のワーキングは、地域連絡会議下部WGと科学委員会下部WGが両輪で進めていくと10月に説明があったと思ったが、新たな外来種のワーキングは来年度休止するとすると両輪で動くわけではなくということか。マニュアル等の成果物は科学委員会下部WGで今後出されるとすると、それがまだない中、どのように整理してよいのか、困惑している。
- 尼子：次回の科学委員会下部WGで対応方針やブラックリストを提示予定である。地域課題WG開催のタイミングは同時開催がよいかと思っている。
- 金子：水際対策としては、ミカンコミバエ等、未然防除すべきターゲットがまだあるが、こうした課題はどのように整理していくのか。
- 尼子：科学委員会下部の新たな外来種WGは、個々の外来種への対応を扱うというよりは、もっと広い対応方針やマニュアルの整備、水際対策等の仕組みを考える場所であった。今年度ブラックリストを作成するので、対象種が発見された場合は専門家への同定依頼や情報周知が行える体制を地域側で確立する必要があると考えている。
- 金子：網羅的なものが今年度中に示され、それをもとに現場の対応を練るということか。
- 尼子：対応方針は、新たな情報を入れ込みながら随時更新するイメージのものである。現場で運用する中で修正が必要な際は専門家への意見照会を行いながら更新していくのご理解いただきたい。
- 山下：兄島のアノール対策や、陸産貝類の緊急対応の現場を動かす中で、専門家とは常に相互にリンクしていく必要があると感じている。専門家の方との意見交換は密に行うべきなので、チャンネルは確保したいと思う。予期せぬ問題も出てくると思われるので現地主体で情報収集を行いながら、随時専門家の助言をいただけるような体制を整備で

きればと思う。

- 金子：そのようになりたい。
- 佐々木(iBo)：地域課題 WG では、会議の位置づけや構成メンバーに関する質問が多かった。その際、支庁からは土木課しか参加しておらず、セクション間の連携が進んでいないとのことだった。次年度以降、地域課題 WG が本会(科学委員会下部 WG)のような位置づけとなる中、構成メンバーの調整はついたのか。
- 尼子：まずは関係行政機関内で情報収集を行っている段階であり、会議への出席者についてはまだ決まっていない。
- 佐々木：会議の際、例えば観光協会は観光客向けの対策のアプローチを考えるために参加することになるだろうが、おおもとのインフラ関係の対応ははっきりしない中、会議が前に進まないのではないかと危惧される。抜けがないようにセティングいただきたい。
- 上杉事務局長：新たな検討対象種や水際対策も含め、今後の検討体制の整備を宿題として受け止めたい。

- 葉山(小笠原環境計画研究所)：ツヤオオズアリについては今後対応マニュアルができるとのことだが、既にツヤオオズアリが侵入している乳房山等における対策は誰が、いつ、どう進めていくのか。私たちが期待する実効性をもって進めていける準備ができているのか、教えていただきたい。
- 尼子：マニュアルはできたとしても実際に対応できる体制になっていないのが課題である。体制の充実、今後地域課題 WG で扱うべき課題と認識している。ツヤオオズアリ対策については、科学委員会の下部 WG でも来春までに動けるよう体制を整えるよう要請があったので、事務局間で検討したいと思う。
- 坂入：乳房山でツヤオオズアリが確認されているのはまだごく一部のエリアであるため、暖かくなったら早急に対処いただきたい。現地での対応人員については地元で考えてやっていきたいので、予算と体制づくりを行っていただきたい。
- 大河内：科学委員会でも申し上げたことだが、小笠原で侵入の未然防止ができていないことは重大な問題として受け止め、今後行っていかねばならないことである。現状では未然防止のためにかけている予算はないに等しい。インターネット時代では、遠方から病害虫が入ってくる可能性がある。未然防止は外来種対策の最優先事項なので、検討をお願いしたい。
- 上杉事務局長：ミカンコミバエの件について、大林氏から補足いただけるだろうか。
- 傍聴者：(島民として参加しているが、新たな外来種の侵入・拡散防止対策 WG のアドバイザーとして補足したもの。)ミカンコミバエについては、小笠原から根絶されて以来 30 年間再侵入はなく、これは小笠原が海洋島であることが大きい。一方、沖縄では台湾からの再侵入が確認されており、温暖化の影響が再侵入の機会が多くなっているとのこと

である。奄美大島では、今年 6 月以降再侵入して世代交代が起きてしまったために果実の出荷規制が始まっている。ミカンコミバエはサナギから成虫になるまで 10 日間。土の中でサナギになる。成虫の寿命は 1～2 か月、最長 6 か月と非常に長い。植物防疫法により出荷制限を受けるのは果実だけであり、苗については制限を受けない。沖縄から苗を購入すると 3 日～5 日で小笠原に届くので、サナギの状態でも小笠原へ侵入する可能性はある。サナギは誘引剤にも寄せられないため見つけるのは困難である。小笠原への侵入は人為的リスクが高く、来年 3 月以降に外国船も入港することと、持ち込み経路は様々考えられる。1998 年には都内淀橋市場でミカンコミバエが見つかっており、果実に付いて持ち込まれる可能性もあるというリスクも知っておいてほしい。

- 上杉事務局長：リスクや進め方も含め、地域課題 WG で考えていきたい。
- 尼子：外来種問題は産業や村民の暮らしにも影響を及ぼす問題なので、関係諸機関・団体に積極的にご参画いただきながら、地域課題を前に進めていきたい。
- 鈴木(iBo)：科学委員会が出た話題であるが、インターネット時代の物流を考えると、母島に直接ニューギニアヤリガタリクウズムシが入るリスクは大きい。ウズムシは特定外来生物なので環境省が対応くださると思うが、ツヤオオズアリのように特定外来生物ではなく、世界の侵略的外来種ワースト 100 に指定されているような種が土に紛れて入っている可能性がある。こうした行政的な受け皿が明確でないものへの対策をその都度地域の行政機関と団体だけで考えていくのは困難である。科学委員会下部の新たな外来種の WG は休止すべきではなく、むしろ強化すべきタイミングである。早期にリニューアルした体制を検討いただきたい。
- 葉山：ミカンコミバエは農業害虫であり植物防疫での対処範囲である。本 WG で、そこまで手を広げるのだろうか。まずは農林水産省の方に関与いただく必要があるだろう。そうでなくても関係機関間の連携がうまくできていない中で、地域課題 WG で扱う範疇を明確にしないとすべて中途半端に終わるのではないかと危惧している。
- 上杉事務局長：実施体制をどう組むかを含めた課題があることは認識している。地域課題 WG の場でそうした課題についても検討していく。
- 藤田(支庁土木課)：支庁土木課では北港でツヤオオズアリの試験駆除を行っている。土木課以外の関係セクションの参画もすべきという指摘があったが、事務局会議レベルでは、港湾課、産業課の状況も仕入れている状況である。地域課題下部 WG にも加わる必要があれば検討するが、今はまだその段階ではないと判断している。
- 堀越：次期管理計画の策定に際し、新たな外来種の問題は最も重要な項目である。産業や住民の生活に係るからこそ、これまで進められなかった問題である。科学委員会下部 WG は休止することとだが、科学的知見のある人、現場の知識がある人、組織論として何ができるかを考える人、そして影響を受ける島民の 4 者が話し合わないと管理計画は書けない。危機的状況を目前にして、これまでのような概念論に終止してはならない。これまで母島にニューギニアヤリガタリクウズムシが侵入していないのは奇跡に近いと

の指摘が千葉委員からあった。こうした危機的状況を地域・行政が認識するとともに、ワーキングの場は実質的に強化できるような話し合いの仕組みが必要である。具体的には、管理計画及びアクションプランに今後 5 年間で実施することを反映できないと、目的は達成できないと思う。

- 藤田：アリの問題については村民生活にも影響が及ぶ課題であるので、まずは行政側でどこまでできるかを真剣に議論する必要がある。そこから村民の皆様にも協力を願うというプロセスで進めていきたいと考えている。
- 上杉事務局長：未然防止のための話と、既に侵入したものへの対策の話は分けた上で、引き続き議論が必要である。関係団体の参画もお願いしたい。

<村民参加促進の取組について>

- ・小笠原村・深谷より資料 2-4 について説明を行った。
- ・これについて意見・質疑はなかった。

(3) 科学委員会からの助言

<外国船の入港について>

- ・環境省・尼子より資料 3 に基づき説明を行った。
- ・これについて以下のような議論があった。

- 渋谷（小笠原村副村長）：村主催の硫黄島訪島事業では、夜間停泊中のおがさわら丸にアカカミアリの飛来があったことを受け、来年度から夜間のライトダウンやデッキ上のチェックを強化することを検討している。また例年、土付きのものの持ち出し禁止や目視確認等を行っている。自衛隊にはリスクの周知と注意の申し入れを行っているが、実際のどの程度協力いただいているかは確認できていない。停泊中の貨物船や給油船の灯りに寄せられたり、輸送艦も行き来しているため、ホバークラフト経由で上陸する可能性もある。おがさわら丸での事例を説明し、協力を要請したいと思う。米軍については、沖縄から訓練関係で小笠原に入る可能性がある。米軍による硫黄島慰霊事業では、民間機をチャーターしてグアム経由で年に 1 度来ており、リスクがある。これらについては自衛隊経由での協力要請が必要であり、以前、環境省経由で依頼いただくよう話した。
- 鈴木（iBo）：外国からの船の入港により、病原菌を含めた様々な外来種の侵入リスクが高まることが想定されている。役割分担は、人については厚労省、産業動物は農林水産省系、自然環境については、現時点では特定外来生物に限ってはいるが、環境省の管轄。人に関しては外国経由の船が入港するたびに厚生労働省の検疫官が来島して立ち会うとのことである。厚生労働省は、蚊とネズミが媒介して人に危険をもたらすものと、小笠原に寄港する前に経由する可能性の高い近隣諸国に分布する危険生物に絞って対策をたてており、意図的な導入はあまり想定されていない。産業動物への影響と自然環境

への影響のリスクは評価されないまま、3 月の外国からの入港を迎えようとしている。小笠原の場合受け皿・枠組みがないので、ワーキングで議論するの可否か、それとも特定の行政機関が担当するのかが明瞭に示されておらず、不安である。

- 尼子：3 月に入港するグアムからの客船は一時寄港の扱いであり、通関はできない。直接の着岸はせず、渡し船を使って上陸する形である。荷物の通関はできないので島に持ち込めるのは必要最小限の携行品のみであり、不自然に大荷物を持って降りる人に対しては荷物検査を行うこともあると税関からうかがっている。科学委員会下部 WG では、携行品の中にオレンジ等が含まれて持ち込まれるリスクも指摘された。
- 渋谷：3 月の寄港は、につぼ丸（会議後注：ばしふいっくびいなす）がグアムを経由して小笠原に寄港するということだが、私の感覚からすると、それよりもヨットや、急患で寄港する外国船の方がリスクが高いように思う。ヨット等は手続きさえ済めば頻繁に接岸している。村のイエシロアリ条例で南の地域からの土付き苗を持ち込み防止としたのは当時はシロアリの侵入を防ぐ目的であったが、ミカンコミバエやヤンバルトサカヤスズメ等も全て土に混ざって持ち込まれるものであり、土が媒介物として重要なファクターになってきていると感じる。

また、議論の場の設定の仕方を考えるタイミングであると思う。これまでは遺産価値の保全という文脈で議論してきたので参加する部署が限られて話が進まなかったが、新たな課題を前に、総合事務所の植物防疫担当、支庁の産業課、村の建設水道課や農業者等より広い関係部署の参画を促すチャンスである。

- 森下村長：ワーキンググループの指摘に対する行政機関の応答は具体性に欠ける。もう少し具体的に答えられることはないだろうか。
- 大河内：土に紛れた農業害虫を防ぐ方法としては温湯処理があり、方法はほぼ確立している。温湯処理の苗への影響が調べられていないが、今後東京都で試験がなされる予定である。ぜひ実行に向けて動いていただきたい。
- 安井（野生研）：20 数年前までは小笠原ではガジュマルが芽生えなかった。沖縄からガジュマルの実を入れた例を目撃した後、ガジュマルコバチが増えることとなった。ガジュマルは侵略性の高い植物であるので、農協で農業者に対して注意喚起する等の措置をとっていただきたい。
- 上杉事務局長：土については対策の手立てがあるので、土を扱う関係者を集めて具体的な手立てを議論する必要がある。外国船については、対策対象が土だけではなく、また違う検討枠組みが必要である。課題ごとに検討の枠組みを整理した上で、次回以降のワーキンググループの体制を検討する必要がある。従来の地域連絡会議の枠組みは広げるが、課題自体は絞りこんで進めるのがよいと思う。
- 金子：3 月に入港予定の客船について、船内の客に対し観光協会から周知することは可能なので、控えてほしい行動等の注意事項について行政で整理していただければと思う。500 人程度が乗船してくる予定なので、リスクは高いと思う。

○安井：島にも内地から花木を販売している店があるが、防疫機関が見ているのかどうか確認してほしい。また、小笠原の固有種と同属の種が入ってきているので、交雑の危険性も懸念している。環境省や総合事務所でご一考いただきたい。

<遺産管理の現状と関係機関の今後の事業予定>

- ・資料4に基づき各管理機関より説明を行った。
- ・これを受けて以下のような質疑応答がなされた。

○佐藤（父島漁協）：父島でのネズミ被害が増えているように思うが、例えば鳥等への影響の調査はなされているか。

○山下：データは十分揃えられていない。例えば東平地区におけるカゴ罠によるモニタリング結果ではネズミは増えていないが、農地や山城、集落において同じ条件での調査が行われていないため、単純に比較はできない状態である。殺鼠剤の消費量等、各機関で行われている様々な調査情報を持ち寄って現状の正確な把握と評価をした上で、今後の父島における対策を検討したいと思う。

○葉山：これまで有人島におけるネズミ対策はあまり進められてこなかったが、有人島のネズミに関する行政連絡会議ができたとのことで期待している。また村の環境課ができたことにも期待している。

○深谷：環境課は3名体制となった。新たな外来種に関する地域課題WGについても、実務的な部分は環境課が中心となって関係機関と調整をしていきたいと思う。

<世界遺産登録5周年記念行事について>

- ・小笠原村・深谷より資料5について説明を行った。
- ・これについて小笠原村・森下村長より以下の補足があった。

○森下村長：本年11月に屋久島の荒木町長から、自然遺産地域4地域の町村で、様々な連携を図っていくことが提案され、各町村長が集まって議論した結果、今後の連携の在り方を模索していくこととなったのでご報告する。

(4) その他

- ・以下のような質疑応答があった。

○金子：科学委員会の場では、来年度遺産管理計画の改定を行うとの報告があったが、こちらではアナウンスはないのだろうか。

○尼子：地域連絡会議下部の部会の一つとして、来年度、遺産管理計画・アクションプラン改定WGを設置する予定である。改めて参加いただくメンバー等ご相談させていただきたい。

○千田（環境省）：もともと管理計画については地域連絡会議において議論することとなっ

ているが、毎回皆様にお集まりいただいて管理計画を検討するのは難しい部分もあり、科学委員会下部WGとの連携も必要なので、メンバーや連携の方法についてはもう少し検討させていただきたい。

○金子：今後5年間の遺産管理の方向性を決める重要なものなので、しっかりとやっていただきたい。国立公園の管理計画の見直しとも密接に関連することだと思うので、そちらとの整合性もとっていただけるようお願いしたい。

○大林：グアムではミカンコミバエは1960年代に根絶されており、現在ははいないはずであるが、最新情報はわからない。(会議後注(12月18日、大林氏よりメールにて補足)：小笠原総合事務所の植物防疫官に確認したところ、グアムから日本へは様々な果実類の持ち込みができないとのことで、これは現在、グアムにはミカンコミバエなどが分布する(ミカンコミバエなどの発生地域である)という前提によるようである。)

また、ミカンコミバエの成虫の寿命は、水もエサもあげない状態で1週間だそうだ。

新たな外来種のWGで出された情報を共有しておく、2011年から2014年の4年間で約200株のマンゴー苗が沖縄から小笠原へ持ち込まれており、そのほとんどが母島へ入っている。今年8～9月に沖縄から25株のマンゴー苗を試験的に購入し調査した結果、そのうち9割の苗から生き物が出てきた。そのうちの9割の生き物は土から出てきており、小笠原にはいないマンゴーの害虫や、ツヤオオズアリ、ウスカワマイマイなども出てきた。今年の11月にも沖縄から母島へマンゴー苗が60株入っており、ヤンバルトサカヤスデやアフリカマイマイ(植物防疫法で持ち出せないはず)、ウスカワマイマイ、貝食性のプラナリア(父島未侵入)などが出てきたそうだ。(事務局注：このアフリカマイマイは死骸であることが後ほど明らかになったため、植物検疫上は問題とされない)

○森田(母島漁協)：母島漁協ではウミガメを育てているが、ネズミによる被害を受けていることをご報告したい。各方面からご支援をいただいていることに感謝を申し上げるとともに、一層のご支援をお願いしたい。

○米澤支庁長より閉会の挨拶

・世界自然遺産を守り育てていくための貴重なご意見を賜りましたことに感謝申し上げます。特に新たな外来種の侵入防止対策は待ったなしの状況であり、優先的に取り組むべき課題であることを改めて認識した。東京都としても今後関係機関・団体と連携をはかりつつ様々な課題に取り組んでいきたいと思う。

以上